

△ 店主が綴る、エッセイのようなもの

くちびるに珈琲を。

the sun in mind, the coffee to lips.

5千円札はどうへ消えた?

もう何年も前の話なんだけど、5千円札を落としたんですよ

買い物の帰り、お釣りをポケットに入れてバイクで走ってたんだけど
家に着いてみたら5千円札がない

ああここから落ちてしまったんだと残念だったんだけど
上着のポケットが盛大に開いていたので

なぜかすぐに「誰かが拾ってくれて、何か美味しいもんでも食べたり
おみやげでも買って帰ってくれたらいいな」って思つたんですけど
豊中で落としたんだから、豊中市民の誰かの足しになればいいなって

例えば、誰にも拾われなくて

水路の脇で漢層になっていたりすると「消失」だけど
誰かの手を渡り続けていく「循環」だったら

広い視野で見ると「失っていない」わけですよね

それはお金だけじゃなくて、食べ物や時間やエネルギーも全部
「消失しない」工夫や意識を持つこと
「もったいない」だつたり「独占しない」っていうことが
重要だと思う

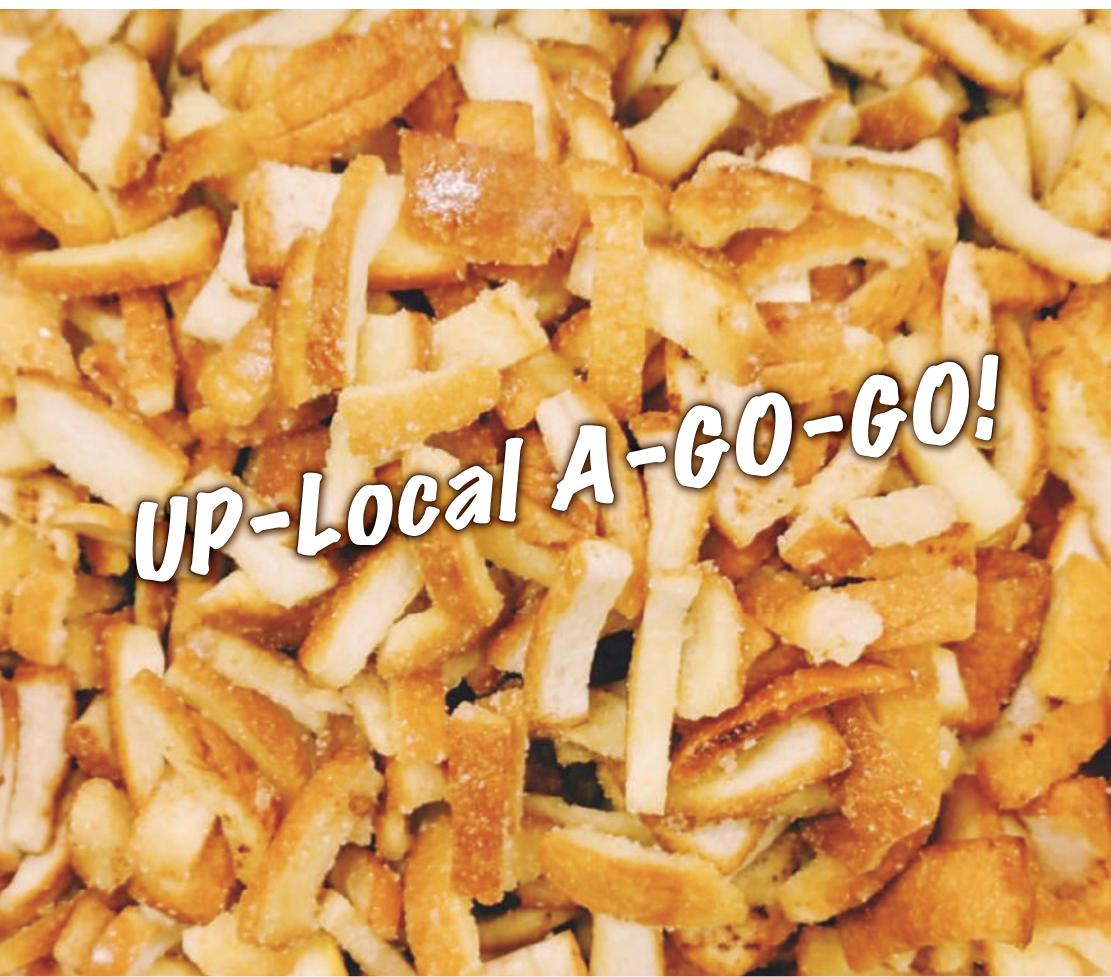
ある意味「独占する」というのは広い視野で見ると、消失していると
も言えるんですね



Magazine for HATTORI City Boys & Girls

2022 Issue.12

UP-Local A-GO-GO!



ピーコックマガジン 2022年6月号(隔月発行)

発行:喫茶ピーコック 大阪府豊中市服部元町1-1-6 TEL:06-6864-0317 デザイン:田口工房 (TAGUCHI design STUDIO)

COFFEE & CURRYHOUSE PEACOCK Issue.12

僕の好きな
言葉

カフェとは、水平と垂直の交わる場所である。

クリミドコーヒー店主 影山 知明

□ 今回の一冊

「その日暮らし」の 経済学

～もう一つの資本主義経済～

小川 さやか

アフリカや中国での「Living for Today（その日暮らし）」を研究する文化人類学者、小川さやかさんの著書。ローカルならではのインフォーマル経済、独自の文化や価値観、融通や貸し借りの経済について実例や実体験をもとにしたとても分かりやすく興味深い解説の数々。

多様性×ローカルネットワーク経済における未来のヒントが満載の1冊です。



本と音とお店のはなし

□ 今回の一曲

Sometime In Tokyo City

曾我部 恵一

15分にも及ぶこの曲は下北沢で音楽レーベル「ROSE RECORDS」やカレーの店「八月」を運営する、サニーデイサービス曾我部さんのソロタイトル。

音楽やカレーや下町っていうキーワードがおそれ多くも親近感。歌詞の中に「下北沢へ来たなら僕らの店に来ませんか」とあるんだけど、「服部に来たならビーコックに来ませんか」って言いたい。「Sometime In Toyonaka City」って曲でも作ろうかな。笑



□ 僕らの町のお店

団欒長屋

大阪府豊中市蛍池西町1-3-32

① 8:00~18:00(月~金)・時間外 7:00~/~20:00

② 06-6836-9011 ③ <https://danran-nagaya.com>

豊中市蛍池にある「多世代でつながる子育て空間(=おうち保育園)」。乳幼児保育や学童保育のほか、こども食堂やおざしきカフェなど施設を拠点に様々な活動をされています。

LINE
公式アカウント



代表の渕上さんとは豊中こどもれもねいどをキッカケに知り合ったんだけど、それ以来いろんな場所で一緒にしています。世代や役割を超えてローカルでゆるく繋がるってほんと大事なんですよね。

上芝英司 | 1979年服部生まれ、喫茶ビーコック3代目店主。喫茶と文筆に勤しむA型乙女座ヒゲメガネ。企画や作文、図画工作が得意。

PEACOCK64



一
タ
ス
ル
ア
ル
シ
ー



<https://peacock64.com>
PEACOCK64 服部



for HATTORI City Boys & Girls

UP-Local A-GO-GO!



今年の4月から「ソーシャルラスクプロジェクト」っていうのをビーコックで始めたんですね。これまでサンドイッチを作る時に出るパンの耳は捨てていたんだけど、ある時ふと「これも何かに使えないかな」と考えだしたのがキッカケです。そこからネットであれこれ調べたりスタッフと一緒に試作をしながら「サン耳ショガーラスク」が完成しました。

ただ単にそれを販売するっていうのも芸がないし、せっかく僕がやるんだ

から何か面白い仕掛けを作れたらなあ」と色々な人に相談したり考えたり。で、5年くらい前にやっていた「豊中こどもれもねいど」っていう「豊中産レモンでレモネードを作つて子供達と販売し、その売上をこども食堂に寄付する活動」を少し応用して、今回のラスクの売上は「豊中市社会福祉協議会の善意銀行を通じて地域のこども食堂や若者支援に寄付をする」というところでまとめました。

元々は廃棄していたものを使つてたけど、味はもちろんラベルや仕上がりも工夫したし、再び社会を循環していくということで「ソーシャルラスク」と名付けました。ありがたいことに皆さん共感してくれたって、4月に始めて現在までの2ヶ月で200個以上も売れてます。

今回のテーマ「アップローカル」というのは僕の造語で、元々は「アップサイクル」という言葉があります。例えば、着古したシャツを継ぎ接ぎして新しいデザインのシャツに仕立て直すとか、牛タンや豚足も元々は捨てられていた部位を食材としての利用を見直したりブランディングしたりすることで、新たな市場価値を生み出します。

わざわざ遠くへ行つたりイチから新しいものを生み出すよりも、「その辺に転がつてゐるあまり物を寄せ集めて工夫する」だけで毎日はもっと楽しめるんじゃないかなと思うんですよ。

地域祭りの再設計や空き家の活用、難しく言えば「意味や在り方の再定義」つことなんだろうけれど、そこにはやっぱり「もつたない精神」みたいなことがあって、それこそそれを置く棚」や「見せる場所」を変えるだけで新しい価値が生まれるものつて地域にはまだまだたくさんあります。あとでは、組み合わせたり、分離したり、周りを巻き込んだりとそれが楽しい。

み出しています。

「豊中こどもれもねいど」は市内に点在していたレモンの木や畑を軸にコントンツ化したし、今回の「ソーシャルラスク」もゴミ箱から地域にステーションを移しました。

そういった「アップサイクル的視点をローカル(地域)で応用する」ことを「アップローカル」だと僕は定義して、それは食品に限らず、人や物事も同じです。